

トルコのシリア越境攻撃

—その目的と域外大国の駆け引き

トランプ大統領の「シリア北部から米軍撤退」発表が
引き金になったトルコのシリア領内侵攻。

実効支配勢力PYD／YPGの自治を認めないトルコ、
アメリカの後ろ盾を失い必死のPYD／YPG。
それに対して、ロシアの存在感が大きくなっている。

今井宏平

アジア経済研究所研究員

いまい、まっへい、二〇一二年トルコ・中東工科大学
国際関係学部博士課程修了。PhD (International
Relations)。一三年中央大学大学院法学研究科
博士後期課程修了。博士(政治学)。日本学術
振興会特別研究員などを経て、一六年より現職。
著書に「トルコ現代史」「中東秩序をめぐる現
代トルコ外交」など。

今年一〇月九日、トルコ軍がシリア領内への越境攻撃を開始した。「平和の泉」作戦と命名された今回の攻撃は、一〇月二二日に収束したものの、国際社会に大きなインパクトを与えた。本稿では、トルコによるシリアへの軍事作戦を概観したうえで、北シリアの大部分を実効支配していた民主統一党(PYD)の出自、域外大国との駆け引き、平和の泉作戦の目的と得られた結果について考察する。

過去のトルコによるシリア越境攻撃

平和の泉作戦はトルコに対する三回目の越境攻撃であった。一回目の越境攻撃は二〇一六年八月から一七年三月まで行われた「ユーフラテスの盾」作戦であった。

ユーフラテスの盾作戦は「イスラム国」(IS)とPYDおよびその軍事組織である人民防衛隊(YPG)をユーフラテス川の東側に押し返すことを目的としていた。この作戦に続いて、一七年の春から夏にかけてシリアに隣接するキリス県に近いシリア領内からPYD／YPGを駆逐する「ユーフラテスの矛」作戦も計画されていたようだが、未遂に終わった。二回目の越境攻撃は昨年一月から三月にかけてアフリンにおいて実施された「オリーブの枝」作戦であった。その目的はトルコ国境の安全保障、およびシリアの領土的一体性を保持する、というものであった。オリーブの枝作戦実施前の時点でPYDは九一一キロにわたるトルコ・シリア国境の六五%、約五九〇キロメートルを支配

下に置いていた。

PYDとはどんな組織か

そもそもPYD／YPGはどのような組織なのだろうか。クルディスタン労働者党（PKK）党首のオジャランは、PKKを立ち上げた一九七八年当初から九〇年代初頭まではイラク、イラン、シリア、トルコに分断されたクルド人居住区を統一して国家建設することを目的とし、武力をその手段として用いた。しかし、九〇年代初頭にトルコ政府とPKKの抗争が激化するなかで、オジャランはPKKの目的を、各国内で独立した自治組織と階級がない社会の実現に変更したが、武装闘争は続いた。九九年にオジャランが逮捕されPKKが弱体化する中でも、トランスナショナルな自治という目標は維持された。この目標を具体化したのが、二〇〇五年に設立されたクルディスタン共同体同盟（KCK）である。KCKは扇の要であると考えられ、KCKの傘下にPKK（トルコ）、PYD（シリア）、クルディスタン自由生活党（PJAK・イラン）、クルディスタン民主的解決党（PCDK・イラク）が設置されている。そして、PYDにおけるYPGのように、各国の党には軍事組織も創設された。この出自を考えると、PYDとPKK

の関連性はやはり強いと言えるだろう。

○五年から一一年まで、PYDはKCK傘下で活動を行ってきたが、シリア内戦がPYDの活動に大きな変化をもたらしした。内戦下でのシリアのクルド人の活動は一枚岩ではなく、PYD以外のクルド政党も多数存在していた。一一年一〇月にクルド国民評議会（KNC）が創設され、シリアにおけるクルド人の一体性が強調されたが、PYDは独自の自治獲得を目指すようになった。PYDがKNCを構成する他のクルド政党と一線を画していたのは、戦闘能力の高さであった。一二年六月にアサド政権軍がクルド人居住区から撤退したのと同時に、PYDは同地域を掌握し、事実上の自治を開始した。その後はISとの戦闘で欧米諸国からの信頼を勝ち取り、トルコから攻撃を受けるまで、北シリアでの自治を確実に強めていった。PYDはシリアでの自治を強める中でKCKの下部組織に加え、シリアのクルド政党というアイデンティティを強めたと評価されている。

PYD／YPGをめぐる駆け引き

話をトルコの越境攻撃に戻すと、二度の作戦の際、トルコ政府が意識していたのはPYD／YPGと良好な関係を

保つアメリカの動向であった。二〇一四年春にISがイラクおよびシリアで勢力を拡大した際、アメリカを中心とした国際社会の期待に応え、ISとの戦いの重責を担ったのが、十分な武力を備えていたPYD/YPGであった。アメリカは武器と必要物資を提供するとともに、派兵されたアメリカ軍がYPGと共に戦い、ISを駆逐していった。

このアメリカの行動を快く思わなかったのがトルコであった。トルコの政策決定者と国民の多くは、PYD/YPGを、トルコと約三六年にわたり抗争を繰り返しているPKKの関連組織でありテロ組織だと考えている。一方でアメリカはトルコと同様、PKKをテロ組織に認定しているが、PYD/YPGとPKKの間に関連はないという立場をとってきた。しかしトルコは、アメリカから渡った武器がいずれPKKに流れることを危惧していた。

ISが力を拡大していた一四年から一六年前半にかけては、トルコ国内でもテロが起こるなど、ISの脅威は大きかった。そのため、この時期、トルコはPYD/YPGへの対応を静観していた。「ユーフラテスの盾」作戦に踏み切る際も、トルコはアメリカと協議を重ねたうえで実施に踏み切っている。

オリーブの枝作戦後の昨年六月四日に、トルコとアメリカ

はPYD/YPGのマンビジュからの撤退に合意し、両国でマンビジュ周辺のパトロールを実施することに合意した。ただし、その後もアメリカ軍はPYD/YPGの北シリアの実効支配を尊重していた。

アメリカに加えて、トルコがPYD/YPGへの対応の際に意識していたのがロシアの存在であった。一五年九月末からシリア内戦に本格的に関与し始めたロシアは、同年一月後半の戦闘機撃墜事件でトルコとの関係が悪化した。しかし、両国は翌一六年六月末に関係を改善して以降、シリア内戦の終結を目指したアスタナ会合をイランと共に継続して開催するなどして、関係を深めている。トルコは北大西洋条約機構(NATO)加盟国でありながらロシアから防空ミサイルシステムのスー400を購入・設置するなどロシアへの依存を高めている。この背景には、アメリカが中東地域への関与を減らしつつあり、同地域のパワーバランスが変化している点が指摘できる。

とはいえ、トルコとロシアの利害がすべて一致しているわけではない。そもそもシリア内戦ではトルコが反体制派を支援しているのに対し、ロシアはアサド政権を支援している。また、ロシアはトルコとの関係が悪化していた一六年二月にPYDのオフイスをモスクワに開設することを許

可し、その後もPYDとの関係を維持している。シリア内戦において、ロシアは唯一、反体制派とそれを支えるトルコ、アサド政権、PYDという主要アクターすべてと交渉可能な国である。

「平和の泉」作戦の緊迫

平和の泉作戦の直接のきっかけは、一〇月六日のトランプ大統領による、シリア北部の国境地帯からの米軍の撤退発表であった。同日、トルコのエルドアン大統領とトランプ大統領は電話会談を行っている。トルコの攻撃はそれから三日後であった。シリアのクルド人たちがアメリカに見捨てられたと感じたことは想像に難くない。トルコ軍はタツルアブヤドからラス・アルアインの長さ一二〇キロメートル、シリア領内三〇キロの深さまで攻め込むことを示唆した。これは、トルコが同地域に設置を目指している安全保障地帯の構想と合致していた（下図参照）。

平和の泉作戦は、当初から国際的に多くの批判を受けたが、トルコ政府はPYD／YPGがテロ組織であるという強い信念に沿って作戦を継続した。一方で、PYD／YPGを見捨てたことが北シリアの混乱を招いたとして、トランプ大統領も批判を受けた。こうした情勢を受け、一〇月

一四日、アメリカはトルコに対して経済制裁を發動した。一方、トルコの越境攻撃を受け、支配地域の一部から撤退したPYD／YPGも生き残りをかけてアサド政権に支援を要請し、アサド政権もこれも受諾した。一〇月一七日にはアメリカのペンス副大統領らが急遽トルコを訪問し、エ



トルコ・ラジオ・テレビ協会の図より編集部作成

ルドアン大統領などと会談した。その結果、トルコは五日間の攻撃停止に合意した。次いで、一〇月二二日にエルドアン大統領はソチを訪問しプーチン大統領と会談した。この会談で両国はタツルアブヤドからラス・アルアインにかけての地域の国境から三二キロの地点まで「緩衝地帯」を設置すること、一五〇時間以内にタツルアブヤドからラス・アルアイン以外のトルコ・シリア国境沿いの地域、マンビジュ、タツルリファットはY P Gの戦闘員を国境から三〇キロ圏外に撤退させること、そしてトルコ・シリア国境沿い一〇キロ圏内ではトルコとロシアが共同でパトロールを実施すること、を確認した。この段階に至り、トルコの越境攻撃は収束した。

安全保障地帯の設置をめぐる議論

平和の泉作戦が過去二回の越境攻撃と異なっていたのは、その目的の一つとして、トルコが、流入しているシリア難民のための安全保障地帯の設置を挙げていたことであつた。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）のウェブサイトにによると、今年一二月九日の時点でトルコには三六八万人のシリア難民が流入している。シリア北部への安全保障地帯の設置について、トルコはシリア内戦初期か

らたびたび言及してきたが、今年に入りその議論が活発になった。八月七日にアメリカとトルコの間で安全保障地帯の設置に関する合意が締結された。ただし、P Y D / Y P G の処遇に関しては意見が対立していた。その後、九月二四日の国連総会においてエルドアン大統領が安全保障地帯の詳細を提示した。それによると、安全保障地帯はトルコ・シリア国境沿い四八〇キロで、国境から三〇キロの地点まで建設する、安全保障地帯内部には一〇の地区と一四〇の村を設置する、テロリストの侵入を防ぐハイウェイを建設する、トルコに流入しているシリア難民の一〇〇万人から二〇〇万人を安全保障地帯に移動させることが計画された。

とはいえ、どれほどのシリア難民が安全保障地帯に移動するかは不透明である。難民の中には帰還を望んでいる者もいるが、彼らが望むのは故郷への帰還である。トルコに住むシリア難民はアレppo近郊の出身者が多く、逆にトルコが安全保障地帯を設置する地域の出身者は少ないと見られる。二〇一六年から断続的にシリアに自主的に帰還する難民があり、その数は年々増えている。しかし、一六年から一九年までにトルコからシリアに自主的に帰還した人数は七万七〇〇〇人にすぎない。また、安全保障地帯の建設

には約二七〇億ドルの費用が必要とされ、エルドアン大統領は欧米諸国に協力を呼び掛けているが、先行きは不透明である。

「平和の泉」作戦の意義は

今回の越境攻撃でトルコは何を達成したのか。まず、シリア北部から一定程度PYD/YPGを掃討することに成功した。これによって、安全保障地帯の設置がより現実味を帯びてきた。また、トランプ大統領のシリアからの撤退がトルコの攻撃の引き金となり、アメリカ軍のほとんどが撤退することとなったことで、PYD/YPGおよびその支配地域でアメリカへの信頼感が失墜した。アメリカとPYD/YPGの協力関係が崩れたことはトルコの思惑通りとなった。対テロを国家運営の重要な柱と位置付けているトルコ政府は、今後もPKKとのつながりがあるPYD/YPGに対する攻撃を実施する可能性がある。

その一方でトルコが達成できなかった、もしくは予想外の出来事もあった。トルコ軍は作戦で七〇二名のYPG兵士を無力化したと報道されているが、これは七万人と言われるYPG兵士の一％にすぎない。また、ISとの戦いで活躍したYPG幹部のマズラム・コバネの処遇についても

トルコの思い通りにはなっていない。二〇一一年にシリアに帰国するまでPKKの兵士として活動していたといわれているコバネに関して、トルコはテロリストとしてアメリカに引き渡しを要求したが、ISとの戦いの功労者であるコバネの引き渡しにアメリカ側は応じていない。加えて、アメリカは北シリアからの撤退の条件としてトルコにISの捕虜および脱獄者の管理の責任を負うように要請した。アメリカ軍はシリア民主軍をサポートする三〇〇名を除き、北シリアからは撤退したが、撤退した軍人は帰国するのではなくIS対策のためにイラク西部に移動した。南部のアルタンフにはいまだに三〇〇の部隊が駐留している。その意味ではアメリカが北シリアから完全に撤退したわけではない。加えて、今回のトルコの越境攻撃に関しては、欧米諸国を中心に国際社会からトルコに批判的な意見が相次いだ。これに対し、トルコは欧州出身の外国人戦闘員を出身国に送還することを表明し、トルコと欧州諸国間の溝が深まっている。

平和の泉作戦は、アメリカの中東への関与の低下、その空白を埋めるロシアの存在感、そしてPYD/YPGに決して妥協しないトルコの姿勢、生き残りに必死なPYD/YPGの姿勢を明確にさせたといえる。●